



TITLE:

西藏文献の史料的價值(上):吐蕃王 統論を中心として

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. 西藏文献の史料的價值(上):吐蕃王統論を中心として. 東洋史研究 1950, 10(6): 486-494

ISSUE DATE:

1950-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145869>

RIGHT:

西藏文献の史料的价值（上）

——吐蕃王統論を中心として——

佐藤 長

本稿に於て使用するブトン佛教史、テプテルゴンボのテキストは東北大學所蔵のもので、閱覽に關しては同大學會我部教授、羽田野講師の便宜惠與によるものであり、バクサムジョンサンは石濱先生によりダス編纂のカルカッタ版を貸與使用せしめられた。又北京版西藏大藏經は大谷大學圖書館所蔵のもので同大學野上教授及び館員蓮葉、酒井兩氏が研究調査の機縁を與へられた。冒頭に記して特に右の諸氏に感謝の意を表したい。

曩に自分は古代西藏史の研究には史料的には支那側と西藏側の兩方を参照せねばならぬが兩者の間には若干の疎隔があり、それは恐らく唐蕃會盟碑を以て統一する事が出来るであらうと云ふ事を述べておいた。^①本稿に於てはその事が具體的に如何に行はれるかを説く

のであるが、それには即ち先づ西藏側の史料を取り上げ、支那史料との差違を摘出し、之を唐蕃會盟碑の記載事項との對比によつて事實決定を行ひ、その史料的价值に或る程度の見通しを立てる行き方を取らねばならぬ。もとより兩史料の差違と云つても種々の點でかなりの差違があるから、茲には所謂西藏王統論の問題に限り、王統とその年代を決定する事によつて結論を引き出すに止めたい。

一

さて西藏側の史料についてであるが、普通人はブトン佛教史、テプテルゴンボ、五代ダライラマ佛教史、バクサムジョンサン、ターラナータ佛教史、蒙古佛教史等を擧げるであらう。當面の對象たる古代西藏史は

此等の各書に種々記載されて居るが、年代的に見て五代ダライ佛教史以下のものは別に新しい史料を加へて居るのでなく、それぞれ殆ど前著の内容を踏襲したものと見做し得る。従つて茲ではブトン佛教史・テプテルゴンボを批判の對象とし、終つて若干バクサムジョンサンの事にも言及したい。

A' bde bar gcegs pai gsal byed chos kyi
bhyun gnas gsun rab rin po chei mdsod. 「善逝
(の教法)を明かにする教法源流言寶の藏」。略名ブ
トン佛教史。著者ブトンリンチェンルン Bu ston rin
chen grub

この書はシャルー sha lu 版、タシルンボ bkra gis
lhun po 版・デルゲ sde dge 版の三種ある事が河口
師によつて記されて居るが、^②現在我が國の東北大學に
藏されて居るものは枚數が此等の何れとも一致しな
い。東北大學のものはブトン全書の一部であり、版と
してもかなり新しく、オーバミラーの此の書の翻譯に
使用されたラサ lha sa 版に^④比するとかかなり魯魚の誤
の多いが目につく。オーバミラーの用ひたテキスト

は河口師の擧げた三種の版の何れかに一致するものか
も知れないが明かでない。河口師がデルゲ版の大凡の
内容とその枚數を示したのに比較すると、^⑥少くともデ
ルゲ版ではない。今茲で使用するテキストは東北大學
所藏のものを基とし、之にオーバミラーの譯註を合せ
校訂したものであつて、汎義第二「西藏國に法が如何に
生じたるかの状態に」 spyi don gñis pa bod
yul du chos ji lcar byun tshul の中、第一「前期
弘通」 sna dar gyi rnam bshag・第二「後期弘通」
phyi dar gyi rnam bshag の部分 [ya. 122b—140
b] である。

ブトン(一二八—一三五八)の事蹟については河口
師のそれに大要が記されて居り、^⑥特に學問的な業績に
ついては別に述べる人もあらうから茲には觸れない。
但此の書の著作年代については河口師は著者三十三歳
の時(西曆一千三百二十一年)と述べて居られる。

B' deb eter shon po 「青冊」。略稱テプゴン。著
者シヨンヌベル gshon nu dpal

この書は版木が一部しかなく、^⑦しかもかなりそれが

古い爲に、版本は頗る稀艱の書となつて居る。又磨滅せる部分を補ふ爲に部分的に版本を新に取り代へたらしい點もあるが、兎に角版本の老朽せる爲か頗る印刷が不鮮明で判讀するのに困難を感じる。茲に使用するテキストはやはり東北大學所蔵のもので、多田等觀先生の談によると印刷は割合に鮮明なのを將來されたとの事であるが、尙讀み難い所が少くなす。

此の書の著者はシヨンスペルであるが、著作年代に關しては本書の中に、

(大明の王の即位せる)戊申の年より今日の丙申の年まで百八年過ぎてあり(第十節藏漢蒙等王統)⑨。

とあり、丙申の年は明の憲宗成化十二年に當るから、之より若干年代が下つて完成されたものに相違ないと思ふ。羽田野伯猷氏が成化十四年とされたのに従つておかう。

内容についてはチャールス・ベルが既に名著「西藏の宗教」⑩の巻尾に、その各章十五項目を紹介したが、後に橋本光實氏が此の書を翻譯出版した時、東洋文庫所蔵のテキストにより十五項目の西藏語の原名と譯文

とを出した。⑫ これで大凡の本書の内容は知り得るのであるが、その中の第一章「教法源流根本・王統・教法前期弘通の章」*dun bu dan po/chos lbyun gi rtsa ba/rgyal rabs/bstan pa sia dar gyi skabs (lb—zga)* が此處では當面の問題の對象になる。

C' lphags yul dan rgya nag chen po dan bod dan sog yul du dam pa'i chos lbyun tshul dpag bsam ljon bzai「聖國(印度)・大支那・西藏・蒙古における正法の興りたる狀勢を(述ぶるもの)如意寶善樹」略名バクサムジョンサン。著者イエシエベンジヨル *ye gas dpal lbyor*。

著者は其の祖先がスンパ地方より出でたるが爲にスンバケンボ *sum pa mkhan po* の名を以て呼ばれる。彼の事蹟については河口師がやはりまとまつた叙述をされて居り、それに従ひ得る。⑬

さて此の書はチャンドラ・ダス *Sarat Chandra Das* がカルカッタに於て活字出版した爲に弘く世界に行はれたが、實は内容は譯文はなく、序文と内容指示目録が附されて居るのみである。この出版によつて本書の

存在は知られたがダスがテキストに用いた版本はいづれの藏版とも知れず、永く學界の疑問であつた。ダス

自身が知らなかつたばかりでなく入藏の諸氏も此の版本の所在地だけは突きとめかねた。長尾雅人氏が昭和十八年内蒙のラマ廟を調査した際、遂に之を綏遠のウスト召で發見したが、若し多田先生等の豫想が誤りないものとすれば、ウストの版本は蒙藏を通じて唯一無二のものとなる。④ダス等が知り得なかつたのは此のやうな地理的な原因によるものかも知れないが、それにして何故彼スンバの全集の版本がウスト等に存在するのであらうか。河口師の記載によると、彼はチャンチャホトクト Icañ'skya hu thug thu と共に乾隆帝の禁廷に出入してその信任を受けて居り、帝より蒙古諸王の精神的指導者としてホトクトの位を授けられたと云ふ。彼は青年期に西藏各地に於て修行し、最後はゴンレン 'dgon lün の寺院の住持となつて行き、蒙古地方に住持した記録は見當らないのであるが、約九年間支那に駐錫したと云ふし、滿洲蒙古の住民より非常な尊崇を受けたと云ふから、或は此のやうな北方民

族の崇敬が當時の蒙古の中心綏遠に版本を藏せしむるに至つた機縁かも知れぬ。

しかし此の書は十七世紀の著作であると云ふ事は前者に比して近代史の上には若干貴重な史料を提供するかも知れないが、古代史については遙に劣るものと見做さざるを得ない理由となる。

以上三個の文獻の中バクサムジョンサンは餘りにも年代が新しすぎる故に一應除外するとして、問題は前者にかかつて来る。プトンの佛教史は内容的に言つて、先づ法の意義・修行法等について説き、此の世界の開闢よりして佛の出世、其の教法及び傳承となり、それが西藏に傳はつて如何に經典が翻譯されるに至つたかを示す。正に佛教の經典の因由を説くものであり、最後に其等の目錄が附されるのも必然の歸結となる。その意味で本書は明白に佛教史なのであるが同じ佛教史でもテプテルゴンボはその點少しく趣を異にして居る。即ち法そのもの及び修行等に關する事は此の書は一切觸れず、直接天地開闢より記述が始まり、印度佛教史の事は頗る簡單にし、西藏における法の諸種の傳

承が最も重んじられ詳述されて居る。

ブトンの場合は膨然たる彼の教學に對する高い價值評價が西藏にて最初に作られた佛教史に對して權威を與へて居るに比し、テブゴンの場合は干支法による年代がよく記入されて居て、西藏佛教史を詳細に且つ正確に整理して居ると云ふ事に歴史書としての價值が置かれて居る。テブゴンの年代の確實性については具體的には之が支那史料とよく一致すると云ふ事も言はれて居る。諸家が此の書を第一等の史書に推すのは此の書における詳細さと正確さの二點にある如くである。よつて我々は次に此の書の内容を、起點となるべき第一卷について少しく検討して問題を歩一步前進させて見ようと思ふ。

二

テブゴンの第一卷の内容は次の各章に分たれて居る。

第一章 歸敬文 *mchod par bryod pa'i skabs*

この章については別に述べる事はなす。

第二章 衆敬王世代 *man po bskur bu'i gduñ*

rabs kyi skabs

この章は衆敬王 *man po bskur ba. mahāsam-*
ata より釋迦の子ラゴラ *sgra gcan zin. rāhula* までの系譜を大凡三種示して居るのであるが、内容は各々の差違をそのまま取り、批判と綜合は行はれて居ない。その三種の系譜を次に説明しよう。

a. *luñ las*「經によれば」とあるのみであるが *hdul ba gñi*「戒律事」^⑩より採つたものなる事明かであり殆ど兩者間に差違はなす。

b. *hyig rten gdags pa*「世間智」より採りたる事が明記されて居るが、現存の *hyig rten bshag pa*「世間住」^⑪の第十一章の前半が之に當る。世間住には此の系統を述べ終つた所に次の如く記して居る。

これは若干アビダルマにある所の王統にして諸佛等によりて普く諸文献より攝要せられたるものなり。律にある所の言葉もすべて次に記さん。^⑫

と云つて、又別の系統を述べてこの第十一節を終つて居る。

c. *hig rten sdags pa de nid las* 「世間智本文(?)によれば」とあるが、前掲世間住の後半が之に當り、前掲引用文の「律にある所の言葉もすべて」以下の部分である。

第三章 佛所行 *sañs rgyas kyi mdsad pahi skabs*

佛が兜率天にありたる事については世間智を引用し、又その人界への再生起心については因施設論 *rgyu sdags pa* による。^⑮ ルンビニ園に誕生以後の事については廣行遊戲經 *rgya cher rol pa* によつて居る。^⑯

享年については有爲無爲決定經 *hdus byas dan hdus na byas rnam par nes* を引いて居るが、此の經典は今以て現存の何に當るのか検出し得ないで居る。

第四章 教法相承 *bstan pahi gtad rabs kyi skabs*

釋迦入涅槃後の佛法の傳系であるが、入楞伽經疏 *skandhar gcogs pahi hgrei* によつて居る。所がその傳法の系統を述べた後に、

今日テンギユルに收められたる入楞伽經疏は二つあ

るも、それには(此の系統)は見えず、未だ收められざるもの(に含まれて)あるらし。^⑰

と云つて居る。事實テンギユル經疏部にある二つの註釋には此等の法系を發見し得ない。所が今我々がプトンを見ると、彼はやはり「入楞伽經 *lañkavatāra* の註釋に次の系統あり」と云つてテブゴンと同じ法系を述べて居る。よつて思ふにテブゴンは當時存在して居た——勿論現在もさうであるが——入楞伽經疏との矛盾に氣が付きながら、此の點は全くプトンの權威を認めて頼つて居たのであらう。

第五章 十八部分裂 *sde pa bcu bryad du eyes pahi skabs*

所據は十八部分裂經 *sde pa rnam pa bcu bryad du eyes pa* とあるが現存の異部宗精釋(*sde pa*) *tha dad par byed pa dan rnam par bçad pa. nikāy- abhedavibhanga vyākhyāna* が最もよへテキストに一致する。之に對して *nārayānadvā* とか *rgyal pahi çes rab* 等の翻譯したテキストを參照して批判を行つて居る。

第六章 波羅提木叉律儀法系 so so thar bai
sdom brgyud kyi skabs

西藏に傳はりたる律儀の系統について述べて居る。

第七章 西藏王統 bod kyi rgyal rabs kyi skabs
西藏傳承による王統をニヤチン^{ニヤチン} gña khri
btsan po より述べてあるが、此の王統は西藏文献に
於てギエルラブを除いてはテブゴンによつて初めて示
された詳細なものである。

第八章 法王諸祖による教法布置 chos rgyal mes
dbon rnam kyi bstan pa btsugs pai skabs

佛法を保護弘通せしめた西藏諸王の事蹟である。

第九章 西藏諸王の根本坦特羅經記 bod kyi rgyal
po rnam rtsa rgyud nas lün bstan paḥi skabs
佛教を保護せる西藏諸王の出現は既に豫言せられた
ものとして文珠師利根本坦特羅 bhyam dpal rtsa
bahi rgyud mañjuśrīmūlatantra の若干の句を解釋
する。

第十章 藏漢蒙等の王統 bod dang rgya hor la
sogs pai rgyal rabs kyi skabs

支那の王統を周より始めて明の中期まで記し、中に
唐代の部分は西藏王統と對照して年代も詳細に記して
ある。

第十一章 結文

本節の題名は記されて居ないが、後期弘通 phyi
dar の開始について詳細に述べて居る。

以上によつて理解される如く第二章以下第五章に至
るまでは全く印度撰述の經典によつて作成された傳承
であつて、その原典は我々が漢譯に於ても簡單に見出
し得るものである。佛教史としては斯の如き構成に對
して大して疑ふべき餘地はないのかも知れない。しか
し嚴密な意味における歴史事實としては直に之を受取
る事は出來ない。第六章は材料は西藏のものであらう
が茲には大して意味を持つては居ない。問題は第七・
八章及び第十章であるが、此處には第七・八章の如く
西藏プロパーの傳承と第十章の如く支那側史料による
歴史の構成があり(後述参照)特に兩者の矛盾を解く爲に若
干無批判に史料を妥協させた點がある。若しテブゴン
の史料的价值が年代の正確さにあり、古代史料として

の價值もこの年代の明かな點にあるとするならば、我々は次に第十章について充分な批判検討を行はなければならぬ。

註

- ① 拙稿「唐蕃會盟碑の研究」東洋史研究第十卷第四號一頁。
- ② 河口慧海著「西藏傳印度佛教歷史」上序一五頁。
- ③ 東北大學「西藏藏外文献假目録」史傳部 No. 4781 [Ya 1—212]
- ④ Obermiller, History of Buddhism (chos-hbyun) by Buston, II vol. Heiderberg, 1931—2.
- ⑤ ラサ版はテキストの場所によつて固有名詞に於て非常に誤多く、時としては讀み難くあると云々 (Obermiller, Ibid. Introduction, p. 5)。
- ⑥ 河口師前掲書序一六頁。
- ⑦ 版木が一部しかないと云ふのは推量であるが、二部以上あると云ふ事も聞かず、又自分の見た二三のこの書も全く版が同じであつたからである。
- ⑧ 東北大學「西藏藏外文献假目録」史傳部 No. 6759 [—473]
- ⑨ sa pho spreñu de nas din sañ gi me spre car ya na lo bgya dañ bgyad soñ ba yin no/
- ⑩ 氏の談話による。尙橋本光實氏も同年に完成されたと云つて居る (橋本譯「蒙古喇嘛教史」四五頁) ベルはこの完成の年を一四七六年即ち成化十二年とする (橋本譯「西藏の

喇嘛教」三六〇頁)

⑪ Charles Bell, Religion of Tibet, 1931

⑫ 橋本譯「西藏の喇嘛教」三九四頁

⑬ 河口師前掲書序七頁

⑭ スンバ全集の版木が綏遠附近にあるとの事は既に橋本氏が風聞して居られた (同氏譯「蒙古喇嘛教史」一二一頁註三) が、實見調査したのは長尾氏が最初である。當時の發見の實情並にこの全集の内容については氏の手記其の他を参照せられた (同氏著「蒙古喇嘛廟記」一八八頁・同「蒙古學問寺」二九四頁以下・拙稿「スンバケンボ全集の版木について」東洋史研究第十卷第三號一四頁)。

尙スンバケンボがチャンヂヤに従つて北京に至つた事については「蒙古喇嘛教史」(橋本譯二八四頁に、即ち康熙帝は令して、

我大德ある一大喇嘛を探求せり。汝は大功徳ある善き喇嘛なるが故に、招請使を遣はしたれば必ず來るべし。と勅令を嚴に (チャンヂヤ) に與へたり。之に従つてスン・バ・ジャンブツン (Sun-bha gabs-drün) 實を主となせる、喝布楚巴・蘭占巴等多くの弟子と共に支那に出駕せり。

とある。

⑮ 北京版甘珠爾第九十六函 240b. Bam po. 80. 漢譯には「根本說一切有部毘奈耶破僧事」及び「衆許摩訶帝經」が之に當るが行文は西藏文テキストとは多少の差違が存する。

⑮ 北京版丹珠爾第六十二函 77a. Tshigs. II.° 金剛經
錄に於て西藏語索引に *gdags paḥi bstan bcos la*
ñjig reten gshag pa. pa. āpitiātre lōkashiti なる語
を引く。 *ñjig rten gdags pa. lokaprajñāpti* なる語
を生じたること (Cordier, Catalogue du Fonds tibétain de
la Bibliothèque nationale. III. p. 392)°

⑯ *hai ni re shig chos mñon pa las ḥbyuñ baḥi rgyal*
poḥi rim pa yin te/bdag ñid chen po de dag gis yi
ge rgyas pa dag las ndor bsdus so//ḥdul ba las ji
skad du ḥbyuñ ba du yañ (yañ du?) bri bar bya ste/
⑰ テキストはこの節の冒頭は非常に不鮮明であるが次の如く
判讀する。

gdags par ḥdul ba las ḥbyun bas

「シクテンダクパの中に律より引用されてあるものによれ
ば」

の意に取る。北京版丹珠爾第六十二函 81b に、テキストに
對應する、より修飾の多い文がある。

⑱ 北京版丹珠爾第六十二函 (112a—208b) に此の書を見出し
得るが、テキストに對應する文章は失檢かも知れないが發
見出来なかつた。

⑲ 梵文 *lāitavistaraśūtra*・漢譯大方廣莊嚴經・出曜經等が
之に當る。

⑳ *dñ sañ bstan ḥgyur na chud paḥi lanḥkar gcegs paḥi*
ḥgrel pa gñis ḥdug pa na ni mi snañ. bas/ma chud

pa shig na yod pa shig gu/

㉑ *pḥags pa lanḥkar gcegs paḥi ḥgrel ba. āryalañkāvat-*
ārayitī (Cordier Catalogue, III. Index du Bstanḥgyur.

Mdo-ḥgrel. p. 372)

ḥphaps pa lanḥkar gcegs pa shes bya ba theg pa chen
poḥi mdoḥi ḥgrel pa de bshin gcegs paḥi snñ poḥi
rgyan shes bya ba. āryalañkāvatārañamamahāyānast-
travṛtītathāgataḥīdayālañkāra nāma (Ibid.)

㉒ Obermiller, Ibid.